

被爆した 東南アジアの留学生

—国を超えた友情—

会 期 2026年3月27日-9月8日

会 場 広島平和記念資料館 東館1階 企画展示室
(広島市中区中島町1-2 平和記念公園内)

入場料 無料

◆詳しい来館案内はこちらから→



サイド・オマールさん



アブドゥル・ラサクさん



ハッサン・ラハヤさん



シャリフ・アディル・サガラさん



ベンギラン・ユソフさん



モハマッド・タルミディさん



ニック・ユソフさん



アリフィン・ヘイさん



ステイオさん



サム・スハエディさん

被爆した東南アジアの留学生 一国を超えた友情—

会期:2026年3月27日～9月8日
会場:広島平和記念資料館 東館1階
企画展示室
主催:広島平和記念資料館

はじめに

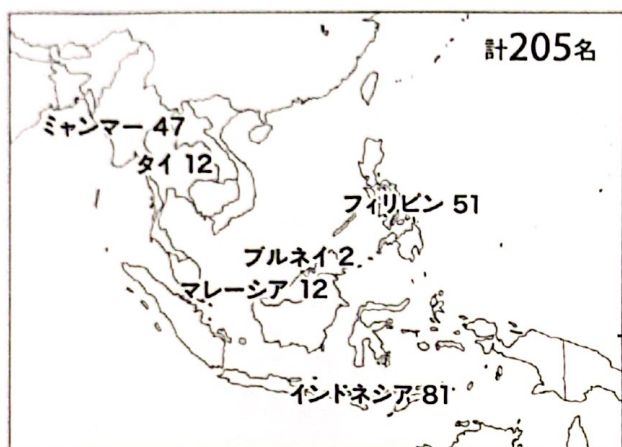
広島平和記念資料館から南に10分ほど歩いた元安川の川土手に1基の碑が立っています。碑の名称は、「興南寮跡碑」。興南寮は、広島に原爆が投下された当時、「南方特別留学生」として日本政府が招いた東南アジアからの留学生が住んでいた場所でした。

東南アジアを占領していた日本の政策によって来日した彼らは、地元の人たちと交流を深めました。原爆が投下された時には、傷つき、仲間を失う困難な状況の中でも、周りの人たちを励まし助け合いました。そうして育まれた絆は、戦後、彼らが故郷に戻った後も絶えることなく、世代を超えて現在まで続いています。

この企画展では、資料とあわせて関係者の証言も交えて、留学生たちの被害の実態と市民との交流を紹介します。



① 興南寮跡碑
広島市中区大手町4丁目



1 東南アジアから日本へ

1941年(昭和16年)12月8日、日本が東南アジアのイギリス領マレー半島に上陸するとともにハワイの真珠湾を攻撃し、太平洋戦争が始まりました。当初は日本が優勢で、半年ほどで東南アジアを占領しました。

その中で、日本の政策に協力する現地の将来の指導者を育成しようと「南方特別留学生」事業を始め、東南アジアの青年を日本の国の予算で日本へ留学させることになりました。

② 各地域から選抜された留学生の数
(1期生・2期生合計/地域名は現在のもの)

1943年(昭和18年)2月～3月ごろから東南アジア各地で南方特別留学生候補が集められました。その中には、将来の指導者として各地の名家や有力者の子どもも多く含まれていました。

1943年(昭和18年)6月末、南方特別留学生の第一陣50名が来日しました。日本に到着した南方特別留学生たちは、翌年3月まで東京・目黒区の国際学友会(※)日本語学校で学びました。日本語を中心とした授業のほか、兵式訓練と柔道の指導がそれぞれ週2回ありました。

南方特別留学生の寮は、国・地域ごとに当てられました。外出は全て許可制で、憲兵が常に監視していました。

※国際学友会:日本で学ぶ海外からの留学生を支援するため、元は1935年(昭和10年)に外務省の外郭団体として設立された組織。



③ 東京駅に到着した南方特別留学生
1943年6月末 東京



④ 整列して歩くフィリピンの留学生
1943年～1944年 東京



留学生は、本人が希望する分野も考慮され、1期生は1944年(昭和19年)4月から、2期生は1945年(昭和20年)4月から、各地の高等教育機関に移りました。

最初の年は、東南アジア出身の留学生たちは寒さが苦手であることが考慮され、東京以外では比較的温暖な西日本の学校が主な進学先となりました。

⑤ 寮職員の上遠野寛子さん(右)と後に原爆で亡くなるサイド・オマールさん
1944年3月28日 東京
広島高等師範学校への進学直前に撮影したもの。
日本になじめるよう心を配った上遠野さんを留学生は深く信頼しました。

2 広島での生活

1944年(昭和19年)から1945年(昭和20年)にかけて24人の南方特別留学生在が広島で学び、寄宿舎の「興南寮」から学校に通いました。戦況悪化にともなう食糧不足には悩まされましたが、地元の人達と交流を深めました。

⑥ 広島で学んだ南方特別留学生

1944年(昭和19年)4月、当時、西日本を代表する教員養成校であった広島高等師範学校に南方特別留学生1期生20人が進学しました。

高等師範学校には南方特別留学生のために、一般学生とは別の「文科興南部」という特別なクラスが設けられました。

広島に来た1期生のうち15人は翌年4月までに転学などで広島を離れました。

一方、残った1期生5人は広島文理科大学に転学しました。同時に東京で準備教育を終えた2期生4人も広島文理科大学に入学しました。この9人はいずれも教育学を専攻しようとする青年でした。

	名 前	来日時 の年齢	出 身	期	1945年の進学・転学先 (都道府県)
1	ハリム・アブバカル	20	フィリピン	1	山口
2	ホセ・デ・ウングリア	18		1	北海道
3	ビルヒリオ・デ・ロス・サントス	16		1	福岡
4	サイド・オマール【※】	16	マライ	1	広島
5	ニック・ユソフ【※】	17		1	広島
6	ボスタム・クルシ	20		1	福岡
7	アブドゥル・ラザク【※】	18	スマトラ	2	広島
8	シャリフ・アディル・サガラ【※】	17		1	広島
9	サアリ・イブラヒム	20		1	東京
10	ダイラミ・ハッサン	19		1	福岡
11	アリフィン・ベイ【※】	19		2	広島
12	モハammad・タルミディ【※】	18	ジャワ	1	広島
13	ムスカルナ・サストラネガラ	20		1	広島
14	サム・スハエディ	20		1	京都
15	スークレスト	19	ジャワ	1	東京
16	スディオ	20		1	京都
17	スパディ	19		1	東京
18	ハッサン・ラハヤ【※】	20	北ボルネオ	2	広島
19	ベンギラン・ユソフ【※】	21		2	広島
20	モウン・テットン	17	ビルマ	1	京都
21	チャン・チェン・ポー	20		1	京都
22	パーシ・ル・ニー	20		1	東京
23	モン・ウイン・チュウ	18		1	秋田
24	モン・モン・ソー	20		1	京都

(【※】※のちに直接被爆)



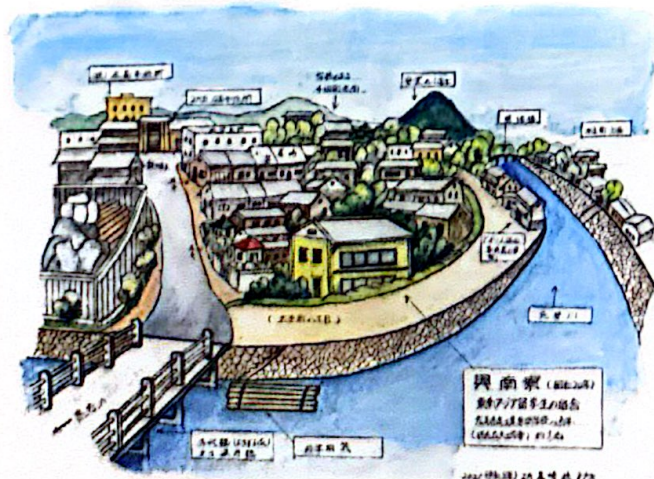
⑦ 興南寮前の南方特別留学生1期生

1944年(昭和19年)9月20日 大手町8丁目

1期生20人が興南寮の前でそれぞれの民族衣装を着て写っています。

興南寮は万代橋のそばで元安川に面した場所にありました。木造2階建てのアパートで、学校までは徒歩10分ほどでした。

留学生は寮の前の土手でよく歌を歌いながら夕涼みをしていました。彼らの故郷の曲である「ラサ・サヤン」や「ブンガワン・ソロ」を時折近所の人とも加わって歌っていました。



「何もない時代にもかかわらず、ときどきおばあさんたちが、留学生の人たちを家によんで、食べ物をくれるんです。(中略) そのおばあちゃんたちは、おそらく原爆で亡くなったと思います。」

1期生 サム・スハエディさんの回想

倉沢愛子編著『南方特別留学生在が見た戦時下の日本人』
草思社、1997年



⑧

⑨ 被爆前の興南寮付近の風景 大手町8丁目 2021年作

「興南寮」の近所に住んでいた尾崎穂花さんが描いた絵。

3 南方特別留学生の被爆

1945年(昭和20年)8月6日、当時広島文理科大学に在籍していた南方特別留学生9人のうち8人が興南寮や学校の教室などで被爆しました。
興南寮は焼けたため、広島文理科大学に避難した留学生たちは周りの人たちと助け合いながら過ごしました。



⑩がれきと化した広島高等師範学校
東千田町

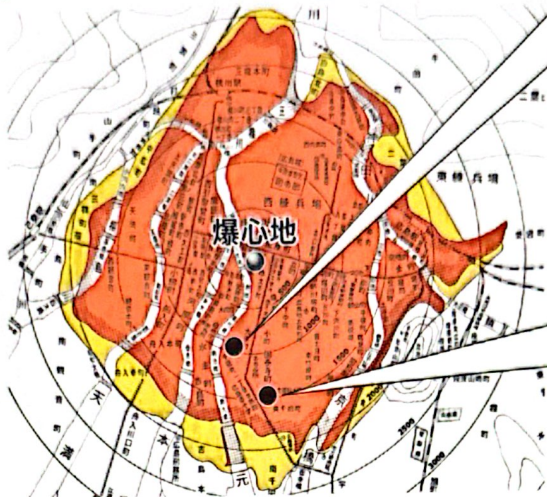
直接被爆した8人の被爆状況

1時間目の授業中に被爆した2期生の4人は倒壊した校舎の下敷きとなりましたが、幸い這い出ることができ、寮に向かいました。

寮で被爆した2人は、倒壊した寮の下敷きになりました。オマールさんは自力で脱出したものの、サガラさんは傷を負い、学校から戻ったハッサン・ラハヤさんとアリフィン・ベイさんに助け出されました。

留学生たちは寮の前の川に退避し、そこで火傷を負った人々をいかにで対岸に運ぶなどして救助しました。

その後彼らは8月7日から14日までの1週間、広島文理科大学の焼け跡で野宿しました。留学生のグループには、寮の所有者家族やその友人、その時偶然出会った人々なども加わり、合せて17～8人が助け合って過ごしました。



興南寮で被爆
(爆心地から900m)

サイド・オマールさん(19歳)⑪

シャリフ・アディル・サガラさん(20歳)⑫



広島高等師範学校の
音楽教室で被爆
(爆心地から1,400m)

アブドゥル・ラザクさん(20歳)⑬

ベンギラン・ユソフさん(22歳)⑭

ハッサン・ラハヤさん(21歳)⑮

アリフィン・ベイさん(20歳)⑯



被爆場所不明

ニック・ユソフさん(19歳)⑰

寮で被爆した説もあるが、通学中だった可能性もある。

モハammad・タルミディさん(20歳)⑱

前日から寮にいなかった。



「私は教室の天井に吹き飛ばされ、しばらく気を失いました。意識が戻った時には頭から血が流れていることに気づきましたが、とにかく友達と一緒に教室の割れたガラス窓の隙間から脱出しようとしてしました。」

2期生 ハッサン・ラハヤさんの回想

(広島大学編『被爆した南方特別留学生への名誉博士号授与の記録』2015年)

被爆直後の広島に入った4人

サム・スハエディさん、スデオさんと、彼らの友人のアドナン・クスマさんの計3人が、広島で被爆した仲間を支援するため8月18日までに京都から広島市内に入りました。

広島文理科大学に在学中だったものの7月から赤痢のため郊外の病院に入院していたムスカルナ・サストラネガラさんは9月中旬に退院し、興南寮の焼け跡を訪れました。

「がれきがいっぱい落ちてぐちゃぐちゃになっていた階段をみんなで掃除して屋上へ上がり、みんなで外を眺めて話をしたりしました。若い者ばかりだったので、そういうことがひとときの慰めでした。」

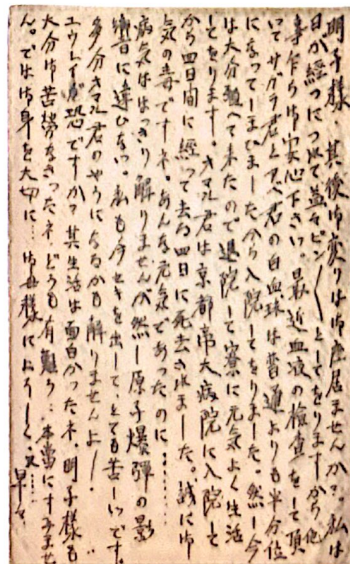
留学生と野宿した栗原明子さんの回想(当時19歳)
(公財)広島平和文化センター2016年制作被爆者証言ビデオ)



原爆で亡くなったニック・ユソフさんとサイド・オマールさん

ニック・ユソフさんは被爆直後から行方不明になりました。留学生たちと親交があった花岡俊男さんが、原爆投下翌日、広島市から約10km離れた五日市町で瀕死の留学生と出会ったと後に証言しています。ニック・ユソフさんの遺骨が五日市町の光禅寺におさめられたことから、花岡さんが出会ったのがニック・ユソフさんだったと考えられています。

サイド・オマールさんは被爆後負傷者を大八車で運ぶなど懸命に働きました。8月下旬、戦争が終わって東京に戻る途中立ち寄った京都で、オマールさんは急激に体調が悪化し、入院しました。検査すると白血球が極端に少なくなっていました。担当の医師が自らの血を輸血するなど懸命な治療を行いました。9月3日、オマールさんは亡くなりました。



⑲アブドゥル・ラザクさんから
栗原明子さんへの手紙
(1945年9月7日消印)

手紙の内容から

(一部抜粋、現代かなづかい)

「オマール君は京都帝大病院に入院してから(中略)死去されました。誠に御気の毒です。あんな元気であったのに……」

4 南方特別留学生の戦後と語り伝える市民

戦後、生き残った南方特別留学生は帰国したり、日本で勉強を続けたり、それぞれの道を歩みました。彼らは年月を経て各国、各界で要職に就いて活躍しました。

その後しばらく、彼らの存在は日本社会から忘れられていましたが、1950年代後半以降、改めて関心が高まりました。その背景には、被爆死した留学生遺族からの問い合わせや、留学生の墓や碑を建立した日本の市民の熱意がありました。

市民有志による活動はその後も続けられ、今日新たな広がりを見せています。



⑬再建されたサイド・オマールさんのお墓の除幕式

1961年9月3日 京都 圓光寺



⑭遺族団のニック・ユソフさんのお墓参り

1964年5月17日 五日市町 光禅寺



⑮興南寮跡碑を訪れた南方特別留学生たち

1995年8月6日

左から被爆したアブドゥル・ラザクさん、シャリフ・アディル・サガラさん、ベンギラン・ユソフさん、ハッサン・ラハヤさん

家が興南寮の近所で南方特別留学生の友人だった花岡俊男さんは、被爆後10年以上経って、留学生たちと再び親交を持つようになりました。

彼らの思い出の地に何も残っていないのはいけないと思い、花岡さんは寮の跡に記念碑を建てるための委員会を立ち上げました。建立のための手続きや資金集めに苦労しましたが、1976年（昭和51年）、興南寮跡碑が完成しました。

その後碑は、南方特別留学生やその遺族が繰り返し訪れる場所になりました。



⑯広島大学によるニック・ユソフさんの法要で祈りを捧げる東南アジア出身者

2025年8月6日 広島市佐伯区 光禅寺

おわりに

学びの機会を求めて日本にやってきた東南アジアからの留学生たちは戦争に翻弄され、広島では原爆によって二人の尊い命が奪われました。母国に帰ることなく命を落とした彼らの無念さを思うとき、戦争を憎まずにはいられません。

一方で、留学生と日本の市民との交流が互いに印象深い思い出として記憶されていることは、同じ人間として理解あい、思いやりを持つことがいかに大切なかを教えてくれます。

被爆した東南アジアの留学生に思いを馳せ、平和を築くために何が大切かを考えていただけたら幸いです。

写真・図版一覧

①②広島平和記念資料館撮影／②⑥広島平和記念資料館作成／③朝日新聞社提供／④⑤⑬⑭⑮広島大学文書館所蔵／⑦⑧中村千重子提供／⑨尾崎稔作／⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯栗原明子寄贈／⑰川本俊雄撮影、川本祥雄提供／⑱⑲Raja Haniza Binti Raja Hanipuddin寄贈／⑳㉑(公財)広島平和文化センター制作／㉒出典：國部健吉『オマール少年の墓』圓光寺、1980年／㉓早川幸生寄贈

謝辞

このたびの展示会開催にあたり、資料の寄贈者、提供者をはじめ、下記の方々ほか多くの方々・機関にご協力いただきました。深く感謝の意を表します。(敬称略・五十音順)
石田雅春、伊藤久子、井上徳子、井上良子、NHK、圓光寺、栗原エミ、栗原明子、勤草書房、公益財団法人アジア学生文化協会、光禅寺、国土交通省中国地方整備局、ズルキフリ・アブドゥル・ラザク、出山知樹、南方特別留学生を語り伝える会(久保田良枝、青木圭子、ヌルハイザル・アサム、早川幸生、平野裕次)、西本雅実、花岡正雄、広島県立図書館、増田正昭、立命館大学国際平和ミュージアム、龍溪書舎

広島平和記念資料館 令和7年度第2回企画展 被爆した東南アジアの留学生 —国を超えた友情—



興南寮跡碑

広島平和記念資料館から南に10分ほど歩いた元安川の川土手に1基の碑が立っています。碑の名称は、「興南寮跡碑」。興南寮は、広島に原爆が投下された当時、「南方特別留学生」として日本政府が招いた東南アジアからの留学生が住んでいた場所でした。

東南アジアを占領していた日本の政策によって来日した彼らは、地元の人たちと交流を深めました。原爆が投下された時には、傷つき、仲間を失う困難な状況の中でも、周りの人々を励まし助け合いました。そうして育まれた絆は、戦後、彼らが故郷に戻った後も絶えることなく、世代を超えて現在まで続いています。

本展では、広島平和記念資料館や他機関の所蔵する貴重な資料100点以上に関係者の証言も交え、南方特別留学生の原爆被害の実態と市民との交流を紹介します。

**「オマル君は京都帝大病院に入院してから(中略)死去されました。
誠に御気の毒ですネ。あんな元気であったのに……」**

南方特別留学生アブドゥル・ラサクさんから栗原明子さんへの手紙
(1945年9月7日消印) 栗原明子寄贈

明子様、其後市役所には在居せんか？。私は
日経つにつれて益々心細い。最近血液の検査をして頂
けり。サガラ君とて、君の白血球は普通よりも半分位
になつてしまひました。何う入院して貰ひたい。然し今
は大分強へて来たので、退院して寮に元氣よく生活
しをります。オマル君は京都帝大病院に入院して
から四日間経つて去る四日に死去された。誠に中
気の毒ですネ。あんな元気であつたのに……
病氣ははつきり解りませんが、然し原爆の影
響に違ひない。私も今をきを出して、とも苦しいです。
多分サガラ君のやうになるかも解りませんよ。
ユウレイ君、どうですか？。其生活は面白かつたネ。明子様も
大分作苦勞なつたネ。どうも有難う。本當にすみませ
ん。では、お身を大切に。中略、後にはよろしく文に……
早々

寮職員の上遠野寛子さん(右)と
原爆で亡くなった南方特別留学生
サイド・オマールさん

1944年3月28日 東京 広島大学文書館所蔵



原爆で亡くなった
南方特別留学生
ニック・ユソフさんの
直筆サイン

1944年
広島大学文書館所蔵

Nik Yusoff Ndi
Jalan Merbau
Kota Bharu
Kelantan
Malai
—
マライ・コタ・バル
ジャラン・メルバウ
ラク・ユソフ
アリ

興南寮跡碑を訪れた留学生たち

1995年8月6日
早川幸生寄贈



バックル

立命館大学国際平和ミュージアム所蔵

興南寮・寮監の永原敏夫さんの遺物は、南方特別留学生のアブドゥル・ラサクさんとベンギラン・ユソフさんが発見しました。特徴的なバックルから永原さんだとわかりました。



表面の写真

サイド・オマールさん、ニック・ユソフさん、Raja Haniza Binti Raja Hanipuddin 寄贈/アブドゥル・ラサクさん、ハッサン・ラハヤさん、ベンギラン・ユソフさん、栗原明子寄贈/シャリフ・アディル・サガラさん、モハammad・タルミディさん、広島大学文書館所蔵/アリフィン・ベイさん、(公財)広島平和文化センター制作/サム・スハエディさん、スタジオさん、中村千重子提供

Introduction

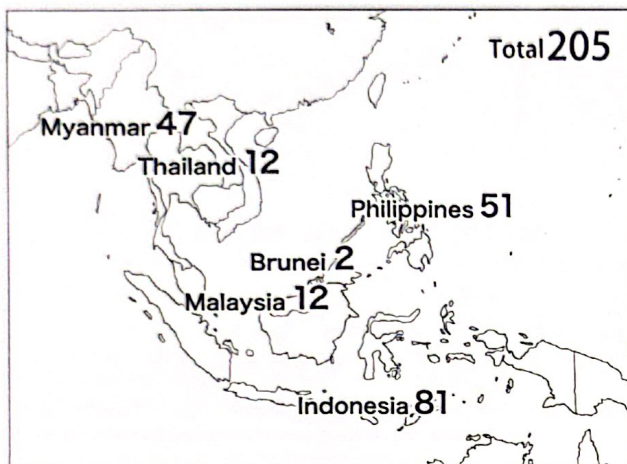
About a 10-minute walk south of the Hiroshima Peace Memorial Museum, a monument stands on the embankment of the Motoyasugawa River. Known as the Konan Dormitory Memorial Monument, it marks the site where students from Southeast Asia—invited to Japan by the government as “Special Students from Southeast Asia”—lived at the time of the atomic bombing of Hiroshima.

These students came to Japan under government policies implemented during Japan’s rule in Southeast Asia, and they formed close relationships with local residents. When the atomic bomb was dropped, even as they themselves were injured and lost friends, they encouraged and supported those around them. The bonds formed in this way endured after the war. Even after they returned to their homelands, these ties continued across generations and remain alive to this day.

This special exhibition introduces the atomic bomb experiences of these students and their interactions with local residents, drawing on archival materials and testimonies from those involved.



(1) Konan Dormitory Memorial Monument
Ote-machi 4-chome, Naka-ku, Hiroshima City



(2) Number of students selected from each region
(First- and second-cohort total / Current region names used)

1 From Southeast Asia to Japan

On December 8, 1941, Japan attacked the British-controlled Malay Peninsula in Southeast Asia and Pearl Harbor in Hawaii, marking the beginning of the Pacific War. Initially, Japan held the upper hand and occupied much of Southeast Asia within about six months.

Amid these developments, Japan sought to cultivate future local leaders who would cooperate with its policy. This led to the launch of the “Special Students from Southeast Asia” program, under which young people from Southeast Asia were sent to study in Japan at the Japanese government’s expense.

From around February to March 1943, candidates for the program were recruited in various parts of Southeast Asia. Many of them were children of prominent families and influential local figures, selected with the expectation that they would become future leaders.

In late June 1943, the first cohort of 50 Special Students from Southeast Asia arrived in Japan. They studied at the Japanese Language School of the International Students Institute* in Meguro Ward, Tokyo, until March of the following year. In addition to classes focused primarily on the Japanese language, they received military drills and judo instruction twice a week.

Dormitories for the Special Students from Southeast Asia were assigned by country or region. All outings required permission, and their movements were constantly monitored by the military police.

*The International Students Institute: Originally established in 1935 as an affiliated organization of the Ministry of Foreign Affairs to support international students studying in Japan.



(3) Special Students from Southeast Asia arriving at Tokyo Station
Late June 1943 Tokyo



(4) Philippine students walking in formation
1943–1944 Tokyo



(5) Hiroko Kadono (right), a dormitory staff member in Tokyo, and Syed Omar, who later died from the atomic bombing March 28, 1944 Tokyo

Photographed just before his enrollment at Hiroshima Higher Normal School.

The students deeply trusted Kadono, who showed great care in helping them adjust to life in Japan.

The Special Students were assigned to higher education institutions across Japan, taking into account their individual interests and fields of study. The first cohort transferred in April 1944, and the second cohort in April 1945.

In the first year, consideration was given to the fact that many students from Southeast Asia were unaccustomed to cold weather. As a result, outside Tokyo, their placements were mainly in the relatively warmer regions of western Japan.

2 Life in Hiroshima

From 1944 to 1945, twenty-four Special Students from Southeast Asia studied in Hiroshima and commuted to school from the Konan Dormitory, a boarding facility. While they struggled with food shortages as the war situation worsened, they formed close relationships with local residents.

(6) The Special Students from Southeast Asia who studied in Hiroshima

	Name	Age upon arrival in Japan	Place of origin	Cohort	Prefecture of transfer or enrollment in 1945
1	Halim Abubakar	20	Philippines	First	Yamaguchi
2	Jose de Ungria	18		First	Hokkaido
3	Virgilio de los Santos	16		First	Fukuoka
4	Syed Omar*	16	Malaya	First	Hiroshima
5	Nik Yusof*	17		First	Hiroshima
6	Bostam Kurshi	20		First	Fukuoka
7	Abdul Razak*	18	Sumatra	Second	Hiroshima
8	Sjarif Adil Sagala*	17		First	Hiroshima
9	Saari Ibrahim	20		First	Tokyo
10	Dailami Hassan	19	Java	First	Fukuoka
11	Arifin Bey*	19		Second	Hiroshima
12	Mochammad Tarmidi*	18		First	Hiroshima
13	Muskarna Sastranegara	20	North Borneo	First	Hiroshima
14	Sam Suhaedi	20		First	Kyoto
15	Soekristo	19		First	Tokyo
16	Soedio	20	Burma	First	Kyoto
17	Soepadi	19		First	Tokyo
18	Hasan Rahaya*	20		Second	Hiroshima
19	Pengiran Yusuf*	21	Burma	Second	Hiroshima
20	Maung Thet Tun	17		First	Kyoto
21	Chan Cheng Po	20		First	Kyoto
22	Percy Loo Nee	20	Burma	First	Tokyo
23	Maung Win Kyu	18		First	Akita
24	Maung Maung Soe	20		First	Kyoto

(* indicates those who were later directly exposed to the atomic bombing.)



(7) First cohort of the Special Students in front of Konan Dormitory
September 20, 1944 Ote-machi 8-chome

All 20 members of the first cohort are pictured wearing their respective traditional garments.

Konan Dormitory stood near Yorozyo Bridge, facing the Motoyasugawa River. It was a two-story wooden apartment building located about a 10-minute walk from the school.

The students often gathered on the embankment in front of the dormitory, singing as they enjoyed the evening breeze. They sang songs from their homelands, such as "Rasa Sayang" and "Bengawan Solo," and local residents would sometimes join in.



Recollections of Sam Suhaedi (First cohort)

"Even in those difficult times, elderly women would sometimes invite the students to their homes and give us food. (omitted) I believe those grandmothers were probably killed in the atomic bombing."

"Nanpo Tokubetsu Ryugakusei ga Mita Senjika no Nihonjin (Wartime Japan as Seen by the Special Students from Southeast Asia)" edited by Aiko Kurasawa, (Soshisha Publishing Co., Ltd., 1997)



(8)

(9) The area around Konan Dormitory before the atomic bombing
Ote-machi 8-chome Drawn in 2021

A drawing created by Minoru Ozaki, who lived near Konan Dormitory

3 The Special Students from Southeast Asia Experience the Atomic Bombing

On August 6, 1945, eight of the nine Special Students from Southeast Asia who were enrolled at Hiroshima University of Literature and Science were exposed to the atomic bombing at Konan Dormitory, in the classroom, and elsewhere. Because Konan Dormitory had burned down, the students who evacuated to the university spent their days helping one another and those around them.



(10) The ruins of Hiroshima Higher Normal School
Higashi-senda-machi

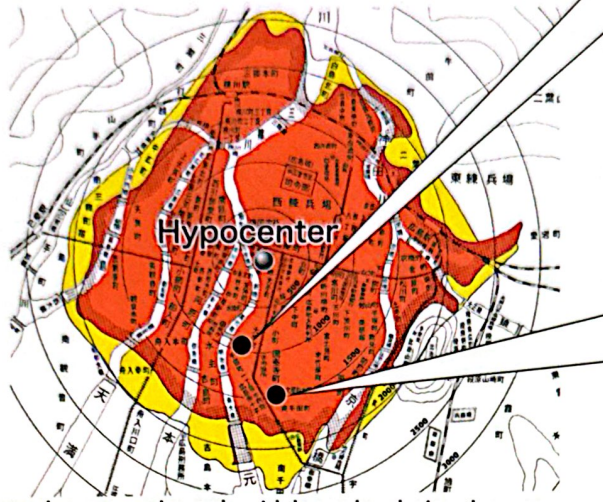
Eight students directly exposed to the atomic bomb

Four students from the second cohort experienced the bombing at school during their first class of the day and were trapped beneath the school building. Fortunately, they were able to crawl out and make their way back to the dormitory.

At the dormitory, two students were exposed to the bombing and were trapped beneath the collapsed building. Omar was able to escape on his own, but Sagala was injured and was rescued by Hasan Rahaya and Arifin Bey, who had returned from the university.

The students took refuge in the river in front of the dormitory, where they rescued people with burns by placing them on a raft and pushing them across to the opposite bank.

Thereafter, the students spent one week, from August 7 to 14, sleeping outdoors in the ruins of Hiroshima University of Literature and Science. The group included the dormitory owner's family, their friends, and others they happened to encounter, bringing the total to approximately 17 or 18 people, who supported one another during this time.



Students exposed at Konan Dormitory (900 m from the hypocenter)

Syed Omar (Age 19) (11)
Sjarif Adil Sagala (Age 20) (12)



Students exposed at the music classroom of Hiroshima Higher Normal School (1,400 m from the hypocenter)

Abdul Razak (Age 20) (13)
Pengiran Yusuf (Age 22) (14)
Hasan Rahaya (Age 21) (15)
Arifin Bey (Age 20) (16)



Students with unknown places of exposure

Nik Yusof (Age 19) (17)
It is believed he may have been at the dormitory, but it is also possible he was on his way to school.



Mochammad Tarmidi (Age 20) (18)
He had not been at the dormitory since the day before the bombing.



Four students who entered Hiroshima after the bombing

In order to support their fellow Special Students who had experienced the bombing in Hiroshima, three students—Sam Suhaedi, Soedio, and their friend Adnan Koesoemaat—arrived in Hiroshima from Kyoto by August 18.

Muskarna Sastranegara, who was enrolled at Hiroshima University of Literature and Science, had been hospitalized at a suburban hospital since July due to dysentery. He was discharged in mid-September and later visited the burned remains of Konan Dormitory.



(19)

Recollections of Hasan Rahaya (Second cohort)

"The blast hurled me up against the classroom ceiling, and I lost consciousness for a while. When I came to, I realized that blood was flowing from my head. Nevertheless, I tried to escape with my friends through a gap in the shattered classroom window."

"Hibaku shita Nanpō Tokubetsu Ryūgakusei e no Meiyō Hakase Gō Juyō no Kiroku (A Record of the Conferment of Honorary Doctorates upon Special Students from Southeast Asia Exposed to the Atomic Bomb)" edited by Hiroshima University (2015)

Recollections of Meiko Kurihara, who slept outdoors with the students (then 19)

"The stairs were cluttered with debris and in disarray, but we cleaned them together and went up to the rooftop. We looked out over the city and talked. Since we were all young, moments like that offered brief comfort."

(Atomic bomb survivor testimony video produced by Hiroshima Peace Culture Foundation in 2016)

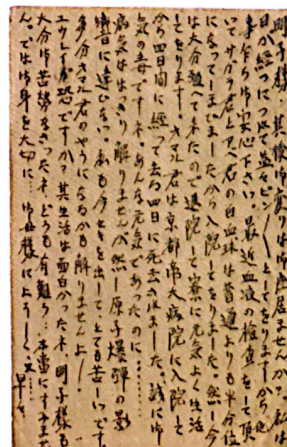


(20)

Nik Yusof and Syed Omar, who died from the atomic bombing

Nik Yusof went missing immediately after the bombing. Toshio Hanaoka, who had been a close friend of the students, recounted that on the day after the bombing, he encountered a gravely injured international student in Itsukaichi Town, about 10 kilometers from Hiroshima City. Because Nik Yusof's remains were later interred at Kozenji Temple in Itsukaichi, it is believed that the student Hanaoka encountered was Nik Yusof.

After being exposed to the bombing, Syed Omar worked tirelessly to help others, including transporting the wounded by handcart. After the war, in late August, while in Kyoto on his way to Tokyo, his condition rapidly worsened, and he was hospitalized. Medical examinations revealed that Omar's white blood cell count had fallen to an extremely low level. The attending physician undertook every possible treatment, even donating his own blood for transfusion, but Omar died on September 3.



(21) Letter from Abdul Razak to Meiko Kurihara
(Postmarked September 7, 1945)

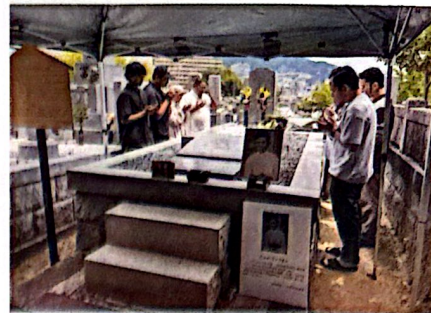
From the letter (excerpt):
"Omar passed away (omitted) after being admitted to Kyoto Imperial University Hospital. It is truly heartbreaking. He had been so full of life..."

4 The Postwar Lives of the Special Students from Southeast Asia and the Citizens Who Preserved Their Stories

After the war, the surviving Special Students from Southeast Asia followed different paths: some returned to their home countries, while others continued their studies in Japan. Over time, many went on to hold prominent positions in their respective countries and fields.

For a period after the war, their presence faded from public awareness in Japan. However, beginning in the late 1950s, interest in their stories was renewed. This renewed attention was prompted in part by inquiries from the families of students who died as a result of the atomic bombing, as well as by the dedication of Japanese citizens who established graves and a memorial monument in their honor.

The activities of these civic volunteers have continued ever since and today are expanding in new directions.



(22) People from Southeast Asia offering prayers at a memorial service for Nik Yusof held by Hiroshima University
August 6, 2025 Saeki Ward, Hiroshima City Kozenji Temple



(23) Unvelving ceremony for Syed Omar's reconstructed grave
September 3, 1961 Kyoto Enkoji Temple

In the summer of 1958, Hidefumi Sonobe, a resident of Kyoto, read a magazine article about the neglected condition of Syed Omar's grave and resolved to rebuild it. Because Sonobe himself had gone to Brazil at about the same age as Omar, Omar's situation did not feel like someone else's story to him.

The reconstruction of Omar's grave was carried forward by Kenkichi Sonobe, the younger brother of Hidefumi, who had fallen ill. The grave was completed at Enkoji Temple in Kyoto on September 3, 1961—Omar's death anniversary.

To this day, memorial services are held each year around the anniversary of Omar's death.



(24) Visit to Nik Yusof's grave by a delegation of bereaved family members
May 17, 1964 Itsukaichi Town Kozenji Temple

In May 1964, a delegation of family members of the Special Students from Malaya who had died in Japan during the war visited Japan. To coincide with their visit, Rev. Tokito Hoshizuki, the head priest of Kozenji Temple, who had safeguarded the remains of Nik Yusof, personally funded the construction of Yusof's grave.

Japanese associates who had maintained ties with the students, as well as local volunteers, also attended the bereaved family group's visit to the grave.

Every year on August 6, Hiroshima University—the successor institution to Hiroshima Higher Normal School and Hiroshima University of Literature and Science—holds a memorial service for Nik Yusof at Kozenji Temple.



(25) Former Special Students from Southeast Asia visiting the Konan Dormitory Memorial Monument
August 6, 1995
From left to right: Abdul Razak, Sjarif Adil Sagala, Pengiran Yusuf, and Hasan Rahaya—all of whom experienced the atomic bombing

More than ten years after the war, Toshio Hanaoka, who had lived near Konan Dormitory and was a friend of the Special Students, began to make contact with the former students again.

Believing that it was unacceptable for nothing to remain at a place so central to their memories, he established a committee to erect a memorial monument at the former site of the dormitory. Although the process of construction involved many challenges, including administrative procedures and fundraising, the Konan Dormitory Memorial Monument was completed in 1976.

Since then, the monument has become a place repeatedly visited by former Special Students from Southeast Asia and their families.

Conclusion

Seeking educational opportunities, students from Southeast Asia came to Japan, only to be swept up in the turmoil of war. In Hiroshima, the atomic bomb claimed the precious lives of two students. When we contemplate the sorrow and frustration of those who lost their lives without ever returning to their homelands, we cannot help but feel a deep hatred of war.

At the same time, the fact that exchanges between the students and Japanese citizens are remembered by both sides as cherished memories reminds us how important it is to understand and care for one another as fellow human beings.

As we reflect on the Southeast Asian students who experienced the atomic bombing, we hope you will consider what is truly important in building and sustaining peace.

Photographs and Figures

(1)(22) Photo by Hiroshima Peace Memorial Museum / (2)(6) Created by Hiroshima Peace Memorial Museum / (3) Courtesy of The Asahi Shimbun Company / (4)(5)(12)(18) (24): Collection of Hiroshima University Archives / (7)(8) Courtesy of Chieko Nakamura / (9) Drawn by Minoru Ozaki / (13)(14)(15)(19)(21) Donated by Meiko Kurihara / (10) Photo by Toshio Kawamoto, Courtesy of Yoshio Kawamoto / (11)(17) Donated by Raja Haniza Binti Raja Hanipuddin / (16)(20) Produced by Hiroshima Peace Culture Foundation / (23) Source: "Omar shonen no haka (The Grave of Young Omar)" by Kenkichi Sonobe (Enkoji Temple, 1980) / (25) Donated by Yukio Hayakawa